

大学の授業でネズミやセミ、もぐら、コオロギなどを食べるビデオを学生に見せます。初めてみた日本人の学生の反応は、「ええーっ」というものです。気持ち悪いと感じる学生も多くいます。「彼らはおかしい」という感想を書くこともあります。このように人間は往々にして自分の文化が当然で、それ以外は「おかしい」と考える傾向があります。問題はこのような意識が他

の文化の人間を見下げ、心ない言葉を吐くことや排除へつながることです。

そこで私が授業で話す考え方が文化相対主義です。これは一般的に文化に優劣はないと理解されています。例えば、日本では刺身を食べます。昔、それは気持ち悪いと考える外国の人が多くいましたが、悪いことでしょうか。タコは「悪魔の魚」と言われ、ヨー



ロッパではあまり食べられませんが、どうでしょう。なまこは？ 何を食べ、何を食べないかに好きか嫌いかはあっても、「良い悪い」を決める絶対的理由はありません。海が近い、良質なたんぱく質が昆虫しかないなどの環境による理由ぐらいです。何を食べるかに良い悪いはないのです。

冷静に考えれば、「良い悪い」の理由がないことは明らかです。しかし、何を食べるか、食べないかを小さい頃から教えられて育った人間は、自分が食べないものを食べている人を見ると思わず気持ち悪いと思ってしまうものです。文化相対主義は口で言うほど簡単なものではありません。でも大事なことは、その違和感に根拠がないことを知ったうえで、他の文化を馬鹿にしたり、他者を排除しないことです。思っても言わない。そこに人間の教養が現れると、私は授業で話しています。

文：県立広島大学 上水流久彦 講師

イラスト：県立広島大学 ロナルド・スチュワート准教授

2013(平成 25)年 広報あきたかた 5 月号掲載